

特集 『空間・社会・地理思想』 創刊より 25 年を迎えて 1990 年代の地理学界におけるひとつのエッジ再訪

水内 俊雄 *

Toshio MIZUUCHI

Special Issue: 25 years since the first issue of *Space, Society and Geographical Thought*
Revisiting One Research Edge in Geographical Academia in the 1990s

1. 特集に至った経緯

1996年に発刊し、本年度で25号と、4半世紀を経過した。たまたま私も定年退職の年となったので、創刊に至る系譜を振り返ってみることにした。その意図は現代の「地理学史」としても次世代に継承することは、アカデミズムの一つの責務を果たす点にあり、それは活字化することでまず果たされよう。その責務を果たす方法として、第1に本誌の創刊に至る経緯を、関わった方々に語っていただくこと、第2にそれを支える書き物、活字化されたものをアーカイブとして共有財産とすること、第3にこうした創刊がもたらした効果や課題、その後に残された遺産を示すことにある。

この企画を考えるにあたって真っ先に思い出したことは、3つあった。私が富山大学時代に、①東洋大の太田勇先生と雑誌『地理』誌上で1989年から始めた「エスニシティ・ジェンダー」の連載、②新潟大の高津斌彰先生が始められた「社会地理学の理論と課題」の作業グループの発足と、それに付随して浜谷先生をヘッドに、社会地理学ニューズレター（作業グループ名がタイトルであったが、ここでは社会地理学と略称）を1991年度はじめに発刊したこと、そして③一橋大の水岡不二雄先生の1993年の経済地理学大会の企画「空間と社会」に至るまでの仕込みと、その企画のその後、についてであった。

私にとって特に記憶に鮮明というか、まさしく1990年代前半の地理学界のひとつのエッジにまつわる学問的営為であったと思われる勢いを感じていたのが、②のなかのニューズレター発刊であった。早速このニューズレターに関わった当時の院生や若手教員であった方々に同報で私の手元にわずかしかなかったニューズレター行方を捜したところ、2週間ほどで、全号をPDF化することが可能となった。こ

のPDF化をめぐる色々やり取りが発生し、このニューズレターの探索をきっかけに、1990年代に社会地理と称する中で、当時の人文地理学界で若手を中心に、一つの「スクール・エッジ」を作っていたその営為を部分的に明らかにできるのではないかとこの予感を持った。

結果として、分担執筆をすることで当時の様子を再現することになった、1956年生まれの水内より若手といういうちょっと勝手な基準を設けて、本誌に特集を持ち込むことになった。1960年生まれ大阪大の堤 研二さん、1962年生まれ金沢大の中島弘二さん、和歌山大の島津俊之さん、1963年生まれで明治大の大城直樹さん、そして1962年生まれながら故人となってしまった丹羽弘一さんについては、1976年生まれ神戸大の原口剛さんを書いていただくという布陣となった。他に関係する若手の方々はおられるが、これは『地域、現場、理論のトライアングルによる地理教育・研究40年——野外調査実習・巡検から共同調査、社会実践へ』（水内俊雄先生ご退職記念企画刊行委員会編 2022）のほうに短いながら寄稿していただくことになった。それぞれこの復元作業はメール上で始まった。当時のことの回顧を通じて、それぞれの寄稿者に自由に語っていただくということで、特集とした。編集の過程で紹介すべきことが多々あり、短時間で仕上げることは難しいと判断し、島津さんには次号に、また丹羽さんについても次号で本格的に紹介することになった。原口さんに加え、この過程で荒山正彦さん、杉山和明さん、柴田陽一さんにも加勢いただいた。

最も鮮烈に思い出すのは、浜谷先生と動かし始めた社会地理学に関するニューズレターの発行である。本特集の寄稿者もこのニューズレターの執筆陣であり、当時の「社会地理学とその周辺」に集う、1950年代後半から60年代前半生まれの20～30才代の若手地理学者たちであった。その求心力は、まず

* 大阪市立大学都市研究プラザ

は日本地理学会の作業グループが1991年4月に新潟大の高津斌彰先生をヘッドに設立されたところから生まれた。この作業グループの前段に当然研究グループがあるわけだが、社会（行動）地理学の必要性を訴えていた神戸大の斉藤光格先生が「社会（行動）地理学」研究グループを動かしておられ、この関心を高津先生が引き継いだものであった。その大会時の研究グループの研究會に、水内をはじめの当時の若手で社会地理学などの新しい関心を持つものが参加して、結果として作業グループが発展的に設立されたと言える。この作業グループは同じく高津先生を代表とする科研で、総合研究（A）「社会集団の変容と社会空間の編成」が1992年より採択されることにより作業グループの合宿研究開催の財政的裏付けを得、この

エッジ活動に正しくガソリンが注入されたのである。

2. ニュースレター発刊の前に

ニュースレター発刊の1年半前、1989年10月から雑誌『地理』にて「エスニシティ・ジェンダー」の連載を東洋大の太田勇先生と始めることになる。この文章の執筆時点でなぜこの企画はどのようにして始まったのか。記憶を復元することはできない。ただ1989年4月の日本地理学会春季大会にて「社会理論と都市社会地理学」という私の発表にて太田先生と意気投合したかもしれない。目次と執筆者および刊号について表1を作成した。

表1 雑誌『地理』に連載した「エスニシティ・ジェンダー」の寄稿者やタイトル一覧

著者	年	月	題目	巻	号	頁
太田勇	1989	9	なぜ「華僑」ではいけないのか	34	9	16-18
太田勇	1989	12	歴史を学ばない日本の移民・難民論議	34	12	18-20
太田勇	1990	3	ステレオタイプ化は国際理解で防げ	35	3	18-20
太田勇	1990	5	女性がいらない日本の地理学界	35	5	18-20
太田勇	1990	8	翻訳にみる差別思想	35	8	18-20
太田勇	1991	3	日系人出稼者の優先入国は人種差別	36	3	14-16
太田勇	1991	5	エスニシティとは何か ― 地理学が扱うべき課題	36	5	18-20
太田勇	1992	4	再論・女性の視点	37	4	18-21
太田勇	1992	9	よそ者が行う調査研究	37	9	66-68
太田勇	1992	12	地理学界は平穏ではいけません	37	12	66-69
水内俊雄	1989	11	社会理論とポストモダニズム	34	11	16-19
水内俊雄	1990	7	エスニシティと地理学論争の最前線	35	7	14-16
水内俊雄	1990	12	社会科学としての人文地理学 ― エスニシティ研究にからめて	35	12	16-18
水内俊雄	1991	4	都市騒擾と人文地理学―1―西成「暴動」にふれて	36	4	18-20
水内俊雄	1991	7	都市騒擾と人文地理学―2―	36	7	20-23
水内俊雄	1992	3	在日朝鮮人2世は発言する	37	3	18-22
水内俊雄	1992	6	朝鮮人強制連行・強制労働を考える	37	6	79-83
熊谷圭知	1991	2	白豪主義からマルチカルチュラリズムへ	36	2	18-20
熊谷圭知	1991	2	白豪主義からマルチカルチュラリズムへ	36	2	18-20
熊谷圭知	1991	6	われわれの地名は「誤ってつけられた」のか？ ― アボリジニー文化とオーストラリア地理学	36	6	18-20
熊谷圭知	1991	12	「男性優位」の地理学に必要な女性の視点	36	12	14-16
熊谷圭知	1992	7	第三世界の開発と女性をめぐる	37	7	73-75
熊谷圭知	1992	11	「理解」と「共感」のあいだから	37	11	70-73
内藤正典	1991	9	西ヨーロッパの外国人労働者問題を考える ― オランダの場合	36	9	18-20
内藤正典	1992	2	ドイツのトルコ人 ― エスニシティと言語のかかわり	37	2	16-18
古賀正則	1990	6	エスニック・マイノリティについての小考	35	6	18-20
太田茂徳	1991	10	ジェンダーと女性問題のあいだから	36	10	90-93
神谷浩夫	1992	1	日本の労働市場とジェンダー	37	1	16-18
佐藤由子	1992	8	マイノリティの視点はおもしろいと思いませんか	37	8	86-89
丹羽弘一	1992	10	男性の視点は可能か？	37	10	78-80

1992年12月まで29回の連載でほぼ毎号であったため3年弱続くことになった。寄稿本数を著者別に見ると、連載企画者の2人、太田先生が10本、水内が7本の投稿数が多く半分はこの二人で、そしてそれ以外を指名してお願いした結果として、熊谷圭知さんが5本とこの企画にはまられた感じであった。あと内藤正典さんが2本、その他の方々は1本ずつとなった。連載名に至った経緯も思い出せない。当時の日本の人文地理学の分野で未開拓というか、暗黙的に忌避されていたのか、メソドロジーがなかったといえるのか、フィールドへのアクセスに欠けていたのか、その意味では当時の地理学界に覚醒の一石を投じたのではないかとと思われる。

社会地理学のニューズレターは、この連載と時期的に後半は重なったが、こちらの主な役割は、合宿研究会のビフォー・アフターの管理であり、そこでの議論のフォローアップや、舞台裏の関係者の歯に衣をさせぬ思いの活字化を保障したことであった。作業グループメンバーへの郵送により、様々な出欠はファクスでやりとりすることもこのニューズレターのいい意味でのクローズドネスを担保していた。寄稿者とタイトル・刊号を表2にまとめている。また全号をPDFで再現している ***L1** (文末のリンク一覧参照、以下同)。

それぞれの思いは、本誌への寄稿者の語りに譲るとして、水内の場合は、スタンス的に自らの研究のセオレティカルな関心もさることながら、大胆なテーマ設定の唱道をアジェーションする傾向にあり、セオレティカルなアプローチの中身の紹介は二の次的なところにあった。このアジェーションについては、浜谷先生によるその創刊号と2号の寄稿文によって火をつけられた感があった。創刊号において、富山大で事務局をさせていただき、その作業チームもまとめてゆくという宣言をした浜谷先生は、2号で「雑感4題」と題して以下のような寄稿をされている。「浜谷節」を見事に出されており、ここに全文を紹介する。

雑感4題——研究会その他での議論の話題として

浜谷正人(富山大)

- ① 最近の欧米や我が国の社会地理学的研究を眺めていると、一方では具体的事例を欠いた空間と社会についての抽象的な論議が行われ、他方で旧態依然とした素朴な経験主義に（無意識にとりまか）るべきか安易にとりまか）るべきかに基づいた実証研究が目立ちます。前者は欧米で、後者は我が

国に顕著といえるのではないのでしょうか。社会地理学は具体的な事例に基づいた社会理論化を意識的に指向すべきだと痛感します。

- ② 現在の我が国の人文地理学全般を覆っている沈滞状況は、今後の飛躍への助走でしょうか、それとも解体の前でしょうか。前者であることを祈念しています。40歳台以上研究者（小生も含めて）の早期引退、若手研究者の達成の遅延—後者についてはイギリスなどでも取沙汰されている由ですが、なぜこうなったのか。理論の高度化からくる不可避の現象なのか、それとも研究のプロブレマティック（問題提起）あるいはパラダイムの偏向のためなのか。前者ならば鋭意努力する他なかりうが、（必要以上の）高度化（抽象化）にも弊害が伴うのではなかりうか。後者ならばパースペクティブの脱構築が要請される。そのような要因を解明し克服するのも作業グループの仕事の一部と思っております。拙訳『社会地理学の探検』が、小生の意図とは逆に沈滞の「原因」になるのではないかと懸念しております。あの程度の理論は速やかに批判的に摂取（超克）して、次の地平に進んでいただきたいというのが小生の翻訳意図なのですが。
- ③ 今日の沈滞は飛躍への助走でありそうだという希望を抱かせる一つの労作、丹羽弘一：関係性の問題としての「野宿者」、「寄せ場」1991. 5. No.4を推奨します。D. レイなどが参与観察したブラック・インナーシティにも似た「寄せ場」という、通常人にはアクセスのない（少ない）地域（人々）の「卓越したレポート」ですが、参考になるのではないのでしょうか。このような徹底した参与観察は容易ではないでしょうが、今日、この種の、社会理論を摂取した具体的な研究が大いに望まれると思っています。
- ④ 既に指摘した我が国における人文地理学全般の沈滞の一つの原因として、この20年近くの間、人文地理学で問題（problems or issues）・政治（politics）・計画（planning）に係わる現象を軽視（あるいは削除）してきたことがあるのではないかと。また、他の原因として、空間的行為や空間パターンの一般性を追究する余り、その多様性やそこからくる不可思議さ・珍奇さ・巧妙さ・面白さなどを見ようとしなかったことも、前のこととも関連して、テーマの貧困化を招来

表2 日本地理学会作業グループ「社会地理学の理論と課題」ニューズレター、発行 富山大学人文地理学教室 目次

冊子番号・発行月日	記事タイトル	種別	寄稿者(筆者)
No.1	報告事項(草津温泉合宿)・連絡事項(次回研究会及び翻訳論文候補リスト)	事務連絡	浜谷正人
1991.5.14	作業グループの今後の研究方向	事務連絡	水内俊雄
No.2	連絡事項(下諏訪合宿案内)	事務連絡	浜谷正人
1991.7.5	堤研二先生より(翻訳論文候補)	要旨	堤研二
	水岡不二雄先生より(翻訳論文候補)	要旨	水岡不二雄
	ドイツ社会地理学(ミュンヘン学派)について — 松田隆典先生との通信	投稿意見	堤研二
	俗流ミュンヘン学派批判	投稿意見	松田隆典
	阿部論文(1990-1991)に対して	投稿意見	太田茂徳
	雑感4部 — 研究会その他の議論の課題として	投稿意見	浜谷正人
	アメリカ地理学会会長スーザン・ハンソン女史来日	特別寄稿	水岡不二雄
No.3	報告事項(下諏訪合宿)	事務連絡	浜谷正人
1991.9.20	連絡事項 翻訳リーディング、理論編、経験的研究編		
	下諏訪での発表・討論について	投稿意見	堤研二
	雑感2題	投稿意見	小田宏信
	合同研究会に参加して	投稿意見	太田茂徳
	アグレッシブな社会空間論+翻訳候補論文	投稿意見	島津俊之
No.4	報告事項(島根大)・連絡事項(須磨合宿)、所感	事務連絡	浜谷正人
1991.10.22	「社会空間の再生産過程」報告へのコメント	投稿意見	島津俊之
	最近考えていること	投稿意見	遠城明雄
No.5	報告事項(須磨合宿)・連絡事項(箱根合宿)	事務連絡	浜谷正人
1992.1.17	翻訳リーディングス刊行に向けて、理論、経験編	事務連絡	浜谷正人
	島津氏コメントへの回答	寄稿	原真志
	原氏の回答を読んで	寄稿	島津俊之
	The Social Geography of Degeneracy	寄稿	水岡不二雄
	参与観察と研究者アイデンティティ、あるいは感情的私信	寄稿	丹羽弘一
	——釜ヶ崎越冬闘争と私的日常生活のさなかから		
	雑感若干	寄稿	大城直樹
No.6	報告事項(箱根合宿、紹介された翻訳論文リスト)	事務連絡	水内俊雄
1992.7.24	お知らせ<翻訳論文集について>	事務連絡	浜谷正人
	「理論」について考えていること	寄稿	上田元
	「地理学を学んだ後のこと」単純な独白の一文	寄稿	太田茂徳
	共通テーマ「空間と社会」(明治大)	寄稿	水岡不二雄
	——経済地理学会第40回大会成功のための呼びかけ		
No.7	報告(東北大)	事務連絡	水内俊雄
1992.10.30	次回研究会合宿のお知らせ(大阪市天王寺区)	事務連絡	水内俊雄
	翻訳の件について	事務連絡	水内俊雄
	「空間制度論」のための覚書	寄稿	島津俊之
No.8	報告(大阪市天王寺区合宿)	事務連絡	水内俊雄
1992.12.8	作業グループの今後の方向性について、翻訳と雑誌地理からの連載企画を受けて	事務連絡	水内俊雄
	次回研究会合宿のお知らせ(御宿合宿)	事務連絡	水内俊雄
No.9	お知らせ(立正大)、所感	事務連絡	水内俊雄
1993.3.22	《研究会・ニューズレター紹介》 ①近代都市史研究会 ②NEMS	紹介	水内俊雄
No.10	報告(御宿合宿)	事務連絡	水内俊雄
1993.5.7	お知らせ(経済地理学会)	事務連絡	水内俊雄
	雑誌地理「社会地理学とその周辺」特集号を読んで	寄稿	太田茂徳
	水岡、吉原氏からの『空間の社会理論』テキストブックの執筆企画	紹介	水内俊雄
	<学会紹介>地域社会学会	紹介	水内俊雄
No.11	報告(立命館大、明治大)	事務連絡	島津俊之
1994.2.18	日本地理学会1994年度春季学術大会(於：明治大学和泉校舎)での予定について	事務連絡	島津俊之
	春季合宿研究会のご案内(首都圏リゾート地)	事務連絡	島津俊之
	今後の「作業」について	事務連絡	島津俊之
	日本地理学会1994年度秋季学術大会シンポジウム(計画、名古屋大)	事務連絡	島津俊之
	日本地理学会研究グループ「空間と社会」の活動方針について	事務連絡	島津俊之

させてきた一因のように思われる。但し、ハーツホーンに帰れというのではなく、新地誌学派やローカリティ派を無批判的に受容すべしというのでもない。(拙訳の最後に地誌学の広告が挿入されているのは、小生の意図ではなく、むしろ遺憾に思っております。このこと、大明堂には内聞に願います)。こういう反省の上に立って、地理学的テーマの豊穰性を、いかに再確立するか、ということも作業グループの仕事のように思われる。皆さん周知の、あの日本都市計画学会の(野放図とも思える)活気はどこからくるのでしょうか。(1991年6月30日)

(このような雑感、諸兄弟からいただけないでしょうか。)

浜谷先生は私が富山大に赴任した1988年で、46才を迎える時であり、京大の地理の院の修了後、金沢大、山形大そして富山大にご本人曰く「日本海側の京大の防人として」1983年8月に赴任されて5年目であった。山形大で同僚であった坂本英夫先生と組んで、1985年に大明堂から『最近の地理学』という教科書を発刊していた。当時の地理学の教科書としては、若手のバリバリ活躍する人を学閥に関係なく執筆陣を擁してのよく売れた名著となった。大学院入試はこれをとにかく一冊読んで準備しなさいという「指導」は2000年代まで続いていたように記憶する。そして浜谷先生の第2弾がP・ジャクソン S. J. スミスの翻訳である『社会地理学の探検』1991年、大明堂であった。

このような背景の中で、浜谷先生の「雑感4題」で真先に取り上げられたのが、丹羽弘一さんの『寄せ場』No.4に掲載された「関係性の問題としての「野宿者」」論文であった。入手しにくく寄せ場学会も閉じられたので、PDFとして公開している *L2。『最近の地理学』なるはやりの手法や考え方の紹介ではない。地理学における社会理論との格闘が『探検』の書で展開され、翻訳として紹介される。浜谷先生の意図は「雑感4題」に明確に示されているように、丹羽論文を通じ「社会理論を摂取した具体的研究が大いに望まれる」とこの「卓越したレポート」の後続に期待をかけていたことの反映であった。

記憶はもうひとつ定かではないが、1991年秋の大阪教育大学での人文地理学大会において、丹羽さんや大城さんの大阪市大院生の一連の社会地理、文化地理の挑戦的発表を聞いた後、当時大阪市大の助教授であった石川義孝さんから「この丹羽君、君の関

心にも近いからよろしく」と、受付近くの広い廊下スペースで紹介されたことを思い出す。この4年後に石川さんの後任で大阪市大に異動することになったが、市大のこの社会地理学(文化地理学)の芽は育てていかねばならないなあ、と当時思ったことを覚えている。

この「雑感4題」と同じ問題意識で、当時の柏書房の広報誌*Libellus*に「人文地理学は過激に惑う」で同じ主旨のことを少々長めに書いている(5号1992年 *L3)。後述する都市史研究つながりで、縁のできた柏書房の編集者の本来の依頼とは相当異なったものになったと思われるが、「雑感4題」の④の指摘に、当時の若い世代は挑戦していくことになる。

私や浜谷先生のアジェンションや学界に吠えるのに対し、当時30才前後の若手の寄稿において、かなり濃厚なコンセプトやタームをめぐる濃厚なやり取りには私自身驚いたことも事実であった。寄稿者であった就職したての若手研究者や九州大や富山大、大阪市大の院生がセオレティカルな部分に饒舌であることをこのニューズレターは活字化した部分もあった。ニューズレターのNo.1に水内は、ここに集う研究者の指向を6つに分類していた。

- ① 社会問題と考えられる空間現象を叙述・説明する
- ② 人文主義的アプローチの行き詰まり打破のための新たな分析枠組みの模索
- ③ ハーベイを基軸にした経済地理学の理論的再構築
- ④ 1970年代後半ごろまでに理解されていた社会地理学へのクリティーク
- ⑤ 欧米における全般的な政治経済的アプローチに対するフォロー

これに加えて、⑥少数ではあるが、社会理論をめぐって闘わされた膨大な議論を独自に展開しようとする努力、としている。②は新しい文化地理学と接続してゆくものであろうが、その中でそれぞれの立場に親近性有する形で自らのポジショナリティや研究スタンスを明らかにする寄稿に、当時は驚きを禁じ得なかった。

研究会での発表を踏まえたやり取りや、寄稿をめぐっての熱い対話が繰り返された。例えば、当時東大院の原真志さんの社会空間をめぐる、大阪市立大院から都立大の助手になっていた島津俊之さんのやり取り、宇都宮大の松田隆典さんと島根大の堤研二さんのドイツの社会地理学をめぐるやりとりなど、そのアカデミックなディベート力に驚くとともに(水内にはないという意味で)、同時にこの熱気を広く共有し何かしらスクールを作ってゆければ

表3 雑誌「地理」掲載の連載「社会地理学とその周辺」の寄稿リスト

『地理』に「社会地理学とその周辺」を連載してきましたが(『日本地理学会作業グループ「社会地理学の理論と課題」通信』No.9, 1993年3月, pp.1-2参照)、1994年8月号をもって連載を終了しました。「社会地理学とその周辺」特集号を含めた、執筆者および題目は以下の通りです。次なる発信活動に向けて態勢を整える必要があらうかと思います。

執筆者	題目	巻号	年	頁
水内俊雄	最近の地理学の指向と社会地理学	38-5	1993	31-38
浜谷正人	欧米の社会地理学の一動向	38-5	1993	37-43
水岡不二雄	経済地理学と社会地理学—統合された社会の空間編成			
	論をめざして	38-5	1993	44-51
島津俊之	社会空間研究の方法	38-5	1993	52-57
野沢秀樹	地理学における行為と構造—D.レイとD.グレゴリー			
	の論争を通して	38-5	1993	58-64
中島弘二	地理学と「空間」論	38-5	1993	65-71
堤 研二	欧米社会地理学とミュンヘン学派(前編)	38-6	1993	106-111
堤 研二	欧米社会地理学とミュンヘン学派(後編)	38-7	1993	109-113
山田晴通	地理学におけるエスニシティ研究によせて。あるいは、			
	板前は包丁を研ぐ	38-8	1993	80-85
杉浦 直	エスニシティ概念と文化・社会地理学	38-9	1993	91-97
丹羽弘一	われわれは何を問われているのか？われわれは自由に			
	それが為せるのか？	38-11	1993	94-99
荒山正彦	風景研究	39-1	1994	102-106
遠城明雄	都心地区をめぐる二、三の問題	39-2	1994	115-119
高木彰彦	「国民国家のたそがれ」と国際社会学の進展	39-3	1994	98-103
大城直樹	フィールドと原稿の間—地誌の別の局面について	39-4	1994	92-97
内田忠賢	地域イベントの展開—高知「よさこい祭り」を事例と			
	して	39-5	1994	92-97
原 真志	共同主観性からみた混住化社会研究の方法論的再検討			
		39-6	1994	103-109
水岡不二雄				
水内俊雄				
山田晴通				
島津俊之	座談会・社会地理学の方角性	39-8	1994	78-85

(空間と社会) ニュースレター2号より転載

と思った次第である。こうしたディベートにはNo.6で寄稿された東北大に移られた上田元さんから、ちょっと冷やかなコメントもいただいた。当時はその意図をよくくみ取れていなかったが、久しぶりに読ませていただいて、浜谷さんの危惧を若干共有しておられることを、今になって首肯しているところである。

社会地理学のニュースレターは1991年から93年まで続き、その母体となった作業グループは、1994年から「空間と社会」研究グループに引き継がれる。社会地理の最終号は富山大から、当時東京都立大の助手としておられた島津俊之さんに担当替えとなり、1994年からは都立大を事務局とする、というか島津さん個人がしばらくは一手に引き受けられることになる。このニュースレターについても下記にリンクしている *L4。

このニュースレターの2号では(1994年9月16日発行)、前述したエスニシティ・ジェンダー連載が1992年12月号で終わり、その後継という形で、雑誌『地理』の1993年の5月号で、「社会地理学とその周辺」

の特集を組み、前連載よりもよりボリュームを取って本格的な寄稿をより多くのメンバーに執筆いただく形で、連載をいただくことになった、そのまとめの表を島津さんは掲載されており、表3として再掲した。たぶん自由な書きっぷりにお任せしたと思うので、アプローチで書かれたり対象を絞って書かれたりと、多様な寄稿となっている。「浜谷節」では、「しっちゃかめっちゃかですなあ」という表現がある程度あてはまる、90年代後半から始まる各分野への全面展開の前触れみたいなアウトプットであったかもしれない。

この「空間と社会」の研究グループの設立趣旨は、社会地理のほうのニュースレター最終号の11号に掲載されており、そちらを参照いただきたい。そして1994年度からは、都立大の島津さんがまず引き受ける形で、ニュースレターが刊行される。目次は表4に掲載している。社会地理の方とは趣が変わり、違う意味で読み応えのある論考が目白押しとなっている。また合宿の吸引力、威力の大きさや、合宿地名のなつかしさとそこでの思い出と相まって、合宿

表4 日本地理学会 空間と社会研究グループ NEWSLETTER 目次

刊行年月日	記事タイトル	種別	寄稿者(筆者)
連絡先 東京都八王子市南大沢1-1 〒192-03 東京都立大学理学部地理学教室 島津俊之 Tel 0426-77-2608 Fax 0426-77-2589			
No.1	報告事項	事務連絡	島津俊之
1994.5.24	連絡事項	事務連絡	島津俊之
	1994年春季合宿レポート(奥多摩合宿)	投稿	水岡不二雄
	社会地理学(者)のベクトル	投稿	太田茂徳
	「自己」への回想的独白——『脱—構築』と『解体』の間隙	投稿	三村宗司
No.2	報告事項(前頁掲載の「社会地理学とその周辺」特集+連載のリスト)	事務連絡	島津俊之
1994.9.16	日本地理学会1994年秋季学術大会シンポジウム「空間編成論と日本の社会・経済地理学 ——D・ハーヴェイの理論を中心に」についてのお知らせ	事務連絡	島津俊之
	第2回研究会(三河合宿)のお知らせ	事務連絡	島津俊之
No.3	報告事項(名古屋大、ハーヴェイ講演会など)	事務連絡	島津俊之
1994.12.28	翻訳の件について	報告	水内俊雄
No.4	1994年度研究グループ会計報告	事務連絡	島津俊之
1995.2.27	第3回研究会のお知らせ(筑波大)	事務連絡	島津俊之
	春季研究合宿(牛久)のお知らせ	事務連絡	島津俊之
	『地理学評論』特集号について(ハーヴェイに関連して)	事務連絡	島津俊之
	関連学界情報	事務連絡	島津俊之
	ハーヴェイ来日と日本の社会・経済地理学	寄稿	水岡不二雄
No.5	報告事項	事務連絡	島津俊之
1995.5.15	翻訳について	事務連絡	島津俊之
	『地理学評論』特集号について	事務連絡	島津俊之
	今後の研究会・合宿について	事務連絡	島津俊之
	地域社会学会第20回大会(統報)	事務連絡	島津俊之
No.6	秋季研究合宿(信貴山)のお知らせ	事務連絡	島津俊之
1995.10.3	翻訳の件について	事務連絡	島津俊之
No.7	報告事項	事務連絡	島津俊之
1996.2.29	翻訳論文集について(ネオ古典)	事務連絡	島津俊之
	第4回研究会のお知らせ(慶應大藤沢)	事務連絡	島津俊之
	春季研究合宿(箱根)のお知らせ	事務連絡	島津俊之
	東京大学社会情報研究所「カルチュラルスタディーズとの対話」講演会のお知らせ	事務連絡	島津俊之
	1996～97年度の「空間と社会研究グループ」の運営について	事務連絡	島津俊之
連絡先 東京都国立市中2-1東本館 〒186 一橋大学経済学部現代経済部門 小川佳子 Tel 0425-72-1101(内線5411) Fax 0425-72-8425(代)			
No.8	報告事項	事務連絡	小川佳子
1996.7.31	第5回研究会のお知らせ(岐阜大)	事務連絡	小川佳子
	地域社学会第21回シンポジウム印象記(原文ママ)	寄稿	中西典子
	お願い	事務連絡	島津俊之
No.9			小川佳子
No.10	あいさつ		小川佳子
1997.2.17	地理の言葉で語りはじめた地理学者たち——『人文地理学のネオ古典』レキシコンの試み	寄稿	水岡不二雄
	報告事項 Audrey Kobayashi談話会報告、余呉合宿報告	報告	水内俊雄
	都立大学研究会お知らせ	事務連絡	小川佳子
No.11	あいさつ		小川佳子
1997.9.17	IICCG(第1回国際クリティカル地理学会)の(多分に私的な)報告	報告	堤 研二
	崔炳斗さんらとの合宿 播磨新宮合宿案内	事務連絡	福田温佳
No.12	あいさつ		福田温佳
1998.2.20	産業・経済地理学のグローバルな新潮流——アラン・J・スコット来日記念研究会のお知らせ	案内	水岡不二雄
	韓国における批判的オルタナティブ地理学の発展—回顧と展望	事務連絡	崔 炳斗

が牽引車であったことを改めて感じ入ったところである。このへんは島津さんにまたどこかで振り返っていただきたいところである。なお11号(1997年9月17日付)の堤研二さんの「IICCG(第1回国際クリティカル地理学会)の(多分に私的な)報告」については、本誌に転載している。関連しての韓国の崔炳斗さんの寄稿も12号に加え、『都市と社会』6号にも掲載されているので、あわせてみていただきたい。EARCAG成立前後の学界背景などをうかがうことができる。

3. スクールをつくること、エッジのイノベーション

少々話し個人的な振り返りに基づく研究のインフラ部分にもどしてみる。たぶん水内の言うスクールは、個人的な狭い定義にもとづくものであり、後程述べる地理思想科研で何度も聞いた竹内啓一先生曰くのナショナルスクール、いわゆる学派ではなく、同好の志のあつまり程度にすぎないと思われる。ここではエッジという表現を用いている。ただ、社会地理というタームに寄り集ってくる研究者に対して、定例的合宿研究会、ニューズレター、それを動かすファンド(主に科研)や学会に認証された組織が有期で動き、シンポジウムや国際展開でネットワークを作るという形で動き始めると、スクールが成立するのではないかという確信ができてつあった。今振り返ってみれば確信と書けるかもしれないが、当時はそう思っていた訳ではない。エッジを入れようとしていたことには違ひなからう。こうした指向をもつに至ったのはやはりいわゆる地理思想科研に出会ったことにある。

自生的に育ってゆく研究関心と、人との出会いによって思いもかけぬ研究フィールドを育んでゆく場合がある。水内の場合には後者の事例が2件ある。1件は九州大の野澤先生のもとでいわゆる地理思想科研のお手伝いを助手としてさせていただいたことである。もう1件は大阪市大に移ってからのホームレスの調査であり、それを主導した社会学の森田洋司先生との出会いである。前者についてここで触れ、後者は別論考で触れている(水内 2022b)。この地理思想科研は、1980年のIGUの日本開催に合わせて日本の地理学史や地理思想を明らかにし、それを英語で刊行物として3年の研究期間の最後に公開するという到達点が設定されていた。水内自身、1980年は学部3回生であり、京大会館で開催されていた模様

を外から眺めている程度であったので、逸話はあとでお聞きすることになったが残念ながら伝えるべき臨場感を持ち合わせていない。それはさておき、1978年からの水津先生を代表とする「地理学的ランゲージュ(表現とその手段)の思想史——その東西比較」、1982年～1983年の竹内啓一先生を代表とする「地理思想におけるパラダイム移行過程の構造」、そして1984年～1985年の野澤先生を代表とする「地理学思想における認識論的諸問題」であり、その最終年度に関わった。そして引き続き野澤先生のもとで新規申請のお手伝いをして、「わが国近代地理学思想形成における土着思想と外来思想」(1987-1988年)というタイトルで採択、地理思想科研の裏方を継続して行った。確か助手としては水津科研は当時京都大の助手の吉田敏弘さん、竹内科研は当時一橋大助手の田中和子さん、そして野澤科研は初年度は当時九州大助手の熊谷圭知さん、そして助手の水内が次年度を受け継ぐという流れがあった。

浜谷先生との出会いは自らの関心の延長線上でアジェンダを生み出したが、その前の野澤先生との出会いは、3つの大きな意味をもたらしてくれた。この経験は次世代には少々継承し難い点と、次世代においては我々の世代とは比較にならないくらいに広く展開されている2点がまずあった。1点目は助手として大型科研をマネジさせていただいたことである。大学院重点化などでいわゆる助手職はかなりの部分専任講師以上の定員に振り向けられ、独立した研究者としてスタートを切れる形に変わった。いい意味でも悪い意味でも教授のもとに教室運営や大学をまたぐ大規模研究の遂行が、ピラミッド型の指示系統のもと、動くということがほぼなくなった。特に大型科研を動かすことは、申請の書き方や計画書の立て方。また予算の積み方や、多くの研究分担者とのやり取り、そして研究会の合宿場所の手配や、当日の深夜にまで続く研究会のマネジメントなどの実務に長けることになった。雑務と思える煩わしさも、研究会の中身の充実により吹き飛ぶものであった。現在こうした助手職の体験はほぼなくなってしまったのではなからうか？

2点目は、アカデミアの国際発信の現場に接することができたことである。この地理思想科研自体、1980年に日本で開かれたIGUでの成果発表を意識して作られたものであり、具体的には地理思想史委員会の運営と深く結びついていた。水津科研から *Japanese Contribution to the History of Geographical Thought* の刊行がシリーズ名として継続的に行なわれた。当時、地理学のメインストリームを担う教室

において、一部のシニアの教員が在外研究という形で長期に欧州や米国に滞在するか、そのシニアが築いた人間関係も利用しながら院生クラスがある程度長期に留学する形はあった。しかし現在のように国際学会に出て、院生クラスも気軽に発表するというマナーは成立前であり、その意味でも竹内先生、野澤先生を始めとするメンバーのIGU地理思想史委員会での発表報告などを、間近で共有できたことは幸運であった。もちろん地理学およびその周辺でダイナミックに地域研究が行なわれていた。地理思想科研のメンバーにも一部そういう研究キャリアの方が入れられたこともあったが、すぐにこの科研から離れられていったというのも事実であった。私は1990年代中ごろまでしばしばトルコに行っていたが、この地理思想科研の国際貢献とはまた異種で別世界のものであった。

3点目は、これは予期しなかったことであるが、地理学史や地政学への関心が芽生えたことにある。別論考(水内俊雄先生ご退職記念企画刊行委員会編2022)で触れたが、修士論文が、明治期の日本の中央政府官僚の都市問題・社会問題の認識プロセスの解明にあったので、地理思想と遠からぬ関連はあったにせよ、当時その関係性には気づいていなかった。しかしこの科研の研究集会で特に夜のいつも深夜に及ぶ懇親の場でしばしば京都帝国大地理学教室の「おとりつぶし」、厳密には地理教員が辞職、東洋史教室に一時預かりになったという時期も含めた地政学の歴史に触れられることが多かった。院生時代に史学科図書室で満鉄関連の史料が背表紙を見せずに横積みされていたのは、敗戦後に地政学批判で除却されるのを免れるためとか、真偽は定かではないが、聞かされた覚えがある。その中には、地理教室の卒業生が当時の奉天市の小学校教諭となり、そこでの調査報告が小学校の紀要みたいな形でおかれており、結構その緻密さに驚いたものであるが。また附属図書館に主にあった満鉄資料の豊富さに魅されて、植民地都市大連の論文を書くに至った。頭の片すみに京都帝大地理と地政学のテーマは、封印してしまうのではない何らかの研究的コミットメントは必要ではないか、という思いは持っていた。

後述するが、都市史研究への関心の中で、日本近代史の小路泰直さん(当時院生だった)の研究会への参加や発表、日本女子大の成田龍一さんとの学会の共同主催などを通じて、柏書房のLibellusへの投稿(1992年)はその縁で実現した。岩波の『思想』で「近代の文法」という特集を行なうので、地理学から寄稿していただけないかとお誘いがその後あ

り、結局地理思想科研での体験から「地理思想と国民国家形成」という、畏れ多いタイトルで寄稿することになった。1994年のことであった。国民国家形成の要であった内務省の中で短命だった地理局の系譜や帝国大学の地理学教室の成立などにも注目したものであった。一次史料にもとづかない深掘りのない表面的な記述に終始した。しかしその経験もあって1994年度の科研申請において、地理思想科研を栗原尚子先生(1989-1990年)、そして次いで野澤先生(1993-1995年)の総合研究(A)「社会理論と地理学」と続き、その後半年度に、無謀にも野澤科研に重ねる形で水内が代表となって申請した。初年度は不採択であったが、1995年度に「地理学における社会・経済理論と空間の思想」と題して3年モノで採択された。タイトルからもわかるように、高津先生の社会地理の科研が1992～93年の2年間を経て、その流れをも継承するものであった。

野澤科研に重ねての申請であったため、違う性格の申請に見えるようにするために新しいメンバーを当然入れる必要があった。そのメンバーは分担者としては、地理思想科研からは、竹内、野澤、山野、久武先生であり、社会地理の流れからは水岡不二雄さん、高木彰彦さんと私、先述した空間論研究会の流れからは社会学の東北大の吉原直樹先生という布陣にした。この流れを交錯させたことについては、社会地理のほうを動かすファンドが高津科研の後に必要であったこと、6度目の申請となる地理思想科研を野澤さんのもとで研究会の参加していたときのある種の停滞感、マンネリ感を克服せねばという思いも加わっていた。そのためにも外気が必要と思い社会地理系の若手を引き込むこと、そして水岡さんの空間の理論へのローバストな関心、吉原さん、吉見さん(研究協力者)に代表される都市社会学への空間論への急接近、日本近代史、特に成田龍一さん(研究協力者)の都市史における空間への関心などを束ね、正しく混成で隊を編成し、二度目の挑戦でうまく行ったのである。

4. 1990年代後半『空間・社会・地理思想』発刊後

社会地理の作業グループが形成されたときに議論された到達点は、論文集、翻訳集、教科書、編著などさまざまな議論されてきた。決断を後押しする意味で1995年からの地理思想科研のファンドが取れたことは大きく、翻訳論集として空間・社会研究グルー

ブから『社会・空間研究の地平——人文地理学のネオ古典を読む』(1996)の刊行、そして新しい地理学の流れを創り出す定期雑誌として本誌、さらに教科書というか論集としての編著『空間から場所へ』(古今書院 1998年)の刊行がその当時の最初の到達点だったのではなかろうか。この書の成立は、同時期に荒山正彦さんが始めに「風景通信」の系譜が強いと思うが、ここでは指摘だけに止めておく。本誌1～24号までの編集後記については、まとめてPDF化しているが、1号の記述をここに掲載しておこう *L5。

本誌は、平成7年度から3ヶ年認められた文部省科学研究費総合研究(A)「地理学における経済・社会理論と空間の思想」(代表者:水内俊雄、課題番号:07308006)での活動を、すぐさま活字化し、なおかつup to dateな情報を記載してゆこうというもくろみのもとに編まれたものである。当初は、ニューズレター方式の気軽なものとして考えていた。平成7年12月に催した研究集会において、研究活動期間の3年は出版費が保証され、20名というこの科研メンバーの量とグループの伝統及びその質の高さを鑑み、本格的にやったらどうか、3年後はこの雑誌での実績を積んでから改めて考えてみたらどうか、というような前向きの姿勢が打ち出された。結果として、長文の本格的な内容や、多くの翻訳などを含めた大部の雑誌となった。

その研究協力者を含めた20名の科研メンバーは(敬称略)、シニア1930～1940年代生まれ:竹内、野澤、山野、久武、源、吉原(社会学)、中堅1950年代生まれ:千葉、成田(日本史)、水岡、高木、神谷、水内、廣松、若手1960年代前半生まれ:堤、島津、遠城、中山、荒山、丹羽、大城、という構成であった。シニア・中堅・若手の融合体となっており、地理思想科研の次世代への橋渡し、中堅の社会地理や空間論的展開だけでなくエスニシティ、ジェンダーや政治地理の牽引者、そして若手では、中堅の関心に加えて新たに文化地理学が加勢した。到達点の最初の成果としての『空間から場所へ』で示された通り、少々ソフト面の傾向の強い社会地理学や文化地理学は、こうした1960年代生まれ世代が橋頭堡を築き、2000年代以降の人文地理学の新しい流れをつくったのである。

社会学の吉見さん、吉原さん、花田達朗さんに加え、若林幹夫さんらとの空間論研究会も、1997年の雑誌『10+1』での大城さんとともに、多木浩二さん、吉見さんとの対談「新しい地理学」*L6などを皮切りに定例の研究会に若手院生が加わる。その当時

の雰囲気は大城さん *L7、堤さん *L8 が簡単に紹介しているのでリンクを見ていただきたい。1999年には『現代思想』12月号で「変容する空間」の特集を組む。「新しい地理学」、「帝国と戦争」、「グローバリゼーション」、「地政学」というパーツで地理思想科研関係者を総動員したのである *L9。売れ筋の学術雑誌にも寄稿できたし、この辺で旗振り役はもう必要ないと、第一線から退くようになったのがこの「世紀末」だったと思われる。

実際のところ、若手の指向とはやや異なり水内自身はハードな政治・社会地理的なアプローチを取っていた。このことは別論考で触れている(水内俊雄先生ご退職記念企画刊行委員会編 2022)。2000年には遅まきながら「近代日本における国土開発・地域開発の地理学的研究」というタイトルの博士論文を書き、山野先生の主査のもと博士号を大阪市大で得た。時間はかかったが、そのラインでの翻訳もエドワード・ソジャの許可をもらい『ポストモダンの地理学』を共訳で2003年に刊行する。そして若手による翻訳も2000年代に入り本格化する。

5. 「時代背影」と地理学における世代とスクール

さて地理思想科研は、さらに1998年から3年間「地政学・植民地主義との関連からみた近代日本の国家形成および地理・空間の思想」と題して水内を代表として継続できた。表5のように2010年代以降まで続くことになる。

合宿研究会と本誌の発刊、英語報告書の刊行がセットとなる。別稿(水内俊雄先生ご退職記念企画刊行委員会編 2022)で述べているように、1998年から突如関わることになったホームレス調査で激流に飲まれてゆく中、この地理思想科研での合宿研究会は、地方の温泉のあるホテルや旅館で行われ、まるで別世界のごとく時間の動きもゆるやかな、忘れえぬ体験が一方であった。昼間の研究発表でへとへとになりながら夕食の後、温泉風呂で頭と体をほぐし、若手のいる部屋、タコ部屋と称したがそこで始まる夜のレクチャーに備える。

まず前半は竹内、野澤先生、東大・京大地理学の大先輩方の生き様についての戦中・戦後の話であり、特に京大の小牧、室賀両先生と東大の飯塚、木内、石田先生たちの先輩を介しての思い出話や地政学、戦争責任や研究成果への評価であった。その次は深夜になると山野、久武レクチャーが始まる。ま

表5 いわゆる歴代の地理思想科研のリスト

事業年度	記事タイトル	代表	大学
1978-1979	地理学的ランゲージ（表現とその手段）の思想史—その東西比較	水津一朗	京都大
1982-1983	地理思想におけるパラダイム移行過程の構造	竹内啓一	一橋大
1984-1985	地理学思想における認識論的諸問題	野澤秀樹	九州大
1987-1988	わが国近代地理学思想形成における土着思想と外来思想	野澤秀樹	九州大
1990-1992	日本における近代地理学の制度的確立過程に関する研究:明治前期の地理学史年表作成	栗原尚子	お茶の水女子大
1993-1995	社会理論と地理学	野澤秀樹	九州大
1995-1997	地理学における社会・経済理論と空間の思想	水内俊雄	大阪市大
1998-2000	地政学・植民地主義との関連からみた近代日本の国家形成および地理・空間の思想	水内俊雄	大阪市大
2002-2004	ポストモダンの景観論・空間論における「文化的転回」の影響とその評価に関する研究	山野正彦	大阪市大
2006-2008	グローバル化時代における公共空間と場所アイデンティティの再編に関する研究	高木彰彦	九州大
2009-2011	公共性とガバナンスからみた近・現代社会の空間編成に関する研究	高木彰彦	九州大
2011-2013	言語と物質性からみた地理的モダニティの構築に関する地理学史的研究	島津俊之	和歌山大
2014-2016	「コモンズ」をめぐる思想・理論・社会的実践に関する地理学史的研究	遠城明雄	九州大
2017-2019	場所・物質・人の関係性に注目した知の形成に関する地理学史研究	福田珠己	大阪府大
現在まで	申請しているが不採択が続いている		

ずは若手への説教で始まったと私は記憶している。特に学生運動と地理学に関し、深く関わり研究者として「生き残っている」ことなど、同窓の地理学者の当時とかその後が、自省も交えつつ時には未明の時間まで続くことになる。紛争時代、特に久武さんからは安田講堂立てこもりの実行部隊に大変近かったこともあり、毎回、新しい事実をひとつひとつ丁寧に聞かせていただいた。それぞれの苦い若い頃の記憶の封印もされつつ、久武さんのアメリカのオジブワ族の古老への岩絵に行きつく話をはじめられる。くり返しもあったが、学史の正史には残らない「時代背影」を共有する。今となっては未完のレクチャーとなってしまったが。

2000年代のこうした夜の期せずしてのヒアリングにおいて、「講師」であった戦前生まれの先生方は60歳前後であった。1970年代後半の地理思想科研黎明期において30歳代であり、戦中に大学の地理学教室の経験者の先生方はまだまだ現役であった。そうした人々の思い出も竹内先生などからお聞きした。この夜のレクチャーを受け、日本の地政学の戦時中を自分なりに位置づけたいという思いが膨らんできたのは事実であり、レクチャーに「席を並べて」いた若手世代にもそうした思いがこの夜の「レクチャー」で培われていたと思う。以前より、地政学の当時をシェアさせていただく中で、また関連書物を読んでもの不完全燃焼感があった。学術的産物とは到底言えないものがある中、そうならざるを得ない当時の先生方の本当の思いを論証はできずとも推量してみたいという探求欲が生まれたのである。

水内が代表となった地理思想科研の継続テーマ

は、こうした関心をストレートに反映すべく、表5にあるように「地政学・植民地主義との関連からみた近代日本の国家形成および地理・空間の思想」というタイトルで、1998年～2000年という期間で採択された。2000年発刊の本誌6号において個人的に、「皇戦地誌」の解題を書き、中身の翻刻をしたことで少しは戦時中の京都帝大の地理学者たちの情念を垣間見た。と言うのも6号の「通称「吉田の会」による地政学関連資料（解題）」にも記したが、石井泰介先生の「この時代の思想状況については、表面に出た文章や記録だけでなく簡単に一刀両断して貰いたくないものだ、というのが率直な感想です」（p. 61）という書面が胸に刺さったことに由来する。石井先生からは本誌5号に「三河（サンガ）紀行」と題して内蒙古への東京帝大の地理学教室の科研調査に学部生として同行した1944年の調査日誌を寄稿していただいた。理学部におかれていた東京帝大はフィールドワークでその意味では科学的に、片や京都帝大は文学部で外国書籍の読み込みで対応したのである。どちらが、という軍配をあげる性格のものではない。久武先生の勤務大学の甲南大での前任の村上次男先生から久武先生による多くのヒアリングメモだけでなく、村上先生からの回顧文も4号に「日本地政学の末路」として御寄稿いただいた。

思い出すのは1945年春季の地理学の課題は、米軍の上陸地がどこになるかの予測であった。鹿児島県の吹上浜と想定したというような回顧も知るにつけ、その同時代の諸先輩方の情念にどれだけ迫り得るか？ 思想や前提、予見に凝り固まらない時代の機微を共有できる柔軟な感性が必要だと思った次第で

ある。水津先生からはめったに私は聞いたことはないが、学徒出陣で1943年に少尉として北海道帯広に着任し、外地に出ずに敗戦を迎えたこと、また春日茂夫先生には大阪帝大の地理学教室50周年の記念に1999年にOB、OGがヒアリングを行ない、それはPDF化され公開されている*L10。この継続という意味も込めて、ご自宅にヒアリングに行ったとき、学徒出陣での最初の着任地が、富山の連隊であり、まさしくその後の富山大五福キャンパスとなったことに、歴史が導く糸を感じた。このヒアリングは音声やメモを失念したままとなった。

まだまだ教えていただきたいことが山ほどありながら、痛恨の極みであったが、竹内先生は2005年に72歳で逝去され、久武先生も2007年に60歳で世を去られてしまった。地理思想科研での夜の特別「レクチャー」の実施は私たちの世代ではとても引き継げるものではない。2010年代、表5にあるように、私より若手世代の代表が動かしてゆく中で、科研のメンバーではあり続けたが、ほとんど研究会には出なくなり、私の役割は本誌の原稿集めと編集、印刷、発送処理、そして広報のみの役割に縮小することになる。

6. 分析と小括

2013年16号の編集後期にも書いたが、院生時代から都立大学が出す「理論地理学ノート」には大変刺激を受けていた。多くの助手がおられ、その中で杉浦芳夫先生をはじめ当時の最先端を走ってられた方々の論考はまばゆくて、それを活字化する雑誌にაცがれを覚えていた。発刊するときはそれを意識して、東西の公立大学の雄が地理学のもと注目される雑誌を出すことを意識した。ただ助手の数というか、教員数では大きく水をあけられていたので、「理論地理学ノート」のような執筆陣を構成するのは大阪市大の力量では無理であろうと判断し、執筆者はなるべく広く募るということを心がけていた。

そこでそれがどれだけ実現されたか、まとめにかえて、ちょっと投稿された方々のタイトルやジャンル、そして執筆当時の所属大学や教員なのか院生なのかで分析をしてみた。まず最新の25号の確定版を含めて、240本の寄稿をいただいている。表6、表7でみるように初めて数値化してみた。大阪市大の筆頭者の割合は26.7%であり、4分の1強というのはいい割合であると思われる。10本以上は、九州大、三重大、金沢大、京都大と続き、全国の地理学教室のある主だった大学を中心に寄稿いただいております。

部で46機関、個人で構成されていることがわかった。大阪市大の地理学教室では、教室の出版活動として認知され、全論考をPDFで公開している。教室の発行物であるが上述のように、大阪市大地理の寄稿率は4分の1強であり、その意味ではユニークな雑誌であると言える。日本の地理学界においても稀有な存在としてあるのではないかな。

中身については、翻訳が時期によって多少はあるが、今のところ53%という値になっており、論文などとほぼ拮抗している。翻訳はその多くが院生クラスで行われており、講読演習などで翻訳されてそのまま「死蔵／私蔵」されてしまわれることが多い中、一定程度公開することのメリットは、この雑誌で発揮されていると思っている。論文などについては、確かに学術雑誌で不掲載になったと明言されて寄稿されたこともあったが、どちらかという学術雑誌の学術度とは異なる、しかし商業雑誌にも掲載されにくいもの、分量的にオーバーしているもの、史料／資料的に価値のあるもの、他媒体からの転載、そして研究者ではなく社会人になられ掲載に値する修士論文や卒業論文という形のものなど、掲載させていただいた。近年は特集での持ち込みも多くなっている。

本誌の意義については、いまだに紙媒体にこだわり続けている点にもある。全国の地理学教室やご寄稿いただいた方などに郵送し続けている。もちろんネットでも大阪市立大学の地理学教室や、大阪市大の図書館のレポジトリで見ることが可能である。地理教室などで学部生や院生が手に取っていただくとともにまだまだ教育的に機能するところがあるのではないかな、と期待している。

個人的にはあと2、3号については、財政的バックがあるので、続けてみたい。雑誌『人文地理』の学界展望などでもよく取り上げていただいております。そのレファレンス／引用の頻度も結構高い、最近を持ち込み原稿が増えている。25年経てみて、確実に蒔いた種は芽となり、その後育っているという実感はある。

本誌だけでなく学術誌でもそのテーマは豊饒となっている。適度に惑いつつの地理学の現状は悪くはないし、時には25年前では思いもよらなかったようなテーマで取り組みが見られ読んでいて面白い。ちょっと楽観的かもしれないし、世の中自体が地理学でも食いつけるほど多様さを増したのかもしれない。ただ、どこが地理学かの線引きは意味をなさないとは思いつつ、制度としての地理学はサバイブしてほしいと願っている。

なんといっても、母体となっている地理思想科研のメンバーの旺盛な執筆欲がベースに続けてきたこ

表6 寄稿者の所属別リスト 1-25号まで

大学名	全著者数	筆頭著者数	延べ合計	実合計
合計			253	202
大阪市立大学	84	54	33.2%	26.7%
九州大学	14	14	5.5%	6.9%
三重大学	13	13	5.1%	6.4%
金沢大学	15	10	5.9%	5.0%
京都大学	11	10	4.3%	5.0%
名古屋大学	12	8	4.7%	4.0%
神戸大学	7	6	2.8%	3.0%
明治大学	6	6	2.4%	3.0%
一橋大学	5	5	2.0%	2.5%
和歌山大学	5	5	2.0%	2.5%
お茶の水女子大学	5	5	2.0%	2.5%
富山大学	6	5	2.4%	2.5%
淑徳大学	5	5	2.0%	2.5%
南山大学	5	4	2.0%	2.0%
関西大学	4	4	1.6%	2.0%
立命館大学	4	4	1.6%	2.0%

3件：東京大学、摂南大学、流通経済大学、大阪府立大学、独立研究者

2件：流通科学大学、龍谷大学、獨協大学、佛教大学、関西学院大学、東京経済大学

1件：大阪大学、東京外国語大学、東京学芸大、東京都立大学、名古屋経済短期大学、フロリダ国際大学、韓国海洋大学校、宮崎産業経営大学、恵泉女学園大学、広島大学、高千穂大学、神戸山手大学、人と防災未来センター、大分大学、島根大学、東北大学、同志社女子大学 合計46機関、人

※フリーの方は出身大学に振り分けた場合と、独立研究者として別掲している場合があり、この表では執筆時の肩書を必ずしも反映はしていない。

表7 寄稿者・ジャンル別の割合

	1-5号	6-10号	11-15号	16-20号	21-25号	合計
合計	51	41	43	31	74	240
院生、学生のみ	12	23	12	13	25	85
院生、学生+教員	11	4	5	4	3	27
教員、フリー	28	14	26	14	45	127
翻訳	34	26	21	8	37	126
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
院生、学生のみ	24%	56%	28%	42%	34%	35%
院生、学生+教員	22%	10%	12%	13%	4%	11%
教員、フリー	55%	34%	60%	45%	61%	53%
翻訳	67%	63%	49%	26%	50%	53%

と、またそのネットワークで色々な若手の研究者を中心に寄稿があることが継続できている最大の要因である。この場を借りて改めてお礼を述べておきたい。当初は私の手作りの編集をしていたが、早い段階でOBの花野孝史さん、そして一緒に会社を始められた(有)CR-ASSISTの四井恵介さんにずっとお世話になっている。その迅速な編集などに感謝している。そして少々残念ではあるが、4月より大阪市立

大学改め大阪公立大学となる。大阪市大を関する最後の号となった。

参考文献

水内俊雄先生ご退職記念企画刊行委員会編(2022)『「地域、現場、理論のトライアングルによる地理教育・研究40年——野外調査実習・巡検から共同調査、社会実践へ」(なお、この論集には66名のOB、OGの寄稿も掲載され、地理学史的に参考にできる記述があることを付言しておく)

『都市と社会』6号(大阪市立大学都市研究プラザ)では、5-55頁にかけて、特集1 水内俊雄教授退職記念論文 が組まれている。構成は以下の通りである。

陳 映芳「より良い都市と社会のために——水内俊雄教授との連携研究」、6-10頁

崔 炳斗「東アジアの批判・オルタナティブ地理学の形成過程を振り返って」、11-20頁

中山 徹「水内俊雄先生の退官にあたって——東アジア地域における「ホームレス」研究の先駆的役割」、21-25頁

鄧 永成「水内さん——憧れと感謝の気持ち」、26-30頁

楊 運生「大阪と台北の架け橋となり、東アジアの都市フォーラムを築く——俊敏なる英雄(俊雄先生)に脱帽」、31-44頁

水内 俊雄「グローバルな都市研究拠点形成への挑戦20年とそのアウトカム」、45-55頁

リンク一覧

L1	社会地理学の理論と課題 ニューズレター 全1-11号	https://drive.google.com/file/d/1UuSuFVL-gMtkU-2ft-jh8Fv6JPOBkon_b/view?usp=sharing
L2	丹羽弘一「関係性の問題としての「野宿者」」寄せ場4号、1991年	https://drive.google.com/file/d/17X-iTsvw-rRgZEvF8vOYTnm2dBkjO8HFz/view?usp=sharing
L3	水内俊雄「人文地理学は過激に惑う」『Libellus』5号	https://drive.google.com/file/d/1cbz-JQ72pNmMkGurqFS06yW7SfgHyaV1w/view?usp=sharing
L4	空間と社会 ニューズレター 全1-12号	https://drive.google.com/file/d/1mlTCH-0F2ili7uhvnfHGukIEENkAsq4dT/view?usp=sharing
L5	空間・社会・地理思想 編集後記 全1-24号	https://drive.google.com/file/d/18146Kgy-jcFoUI2PK-Wl0_Kq1c4Qx0pZl/view?usp=sharing
L6*	水内、大城、多木、吉見対談 「新しい地理学」	https://drive.google.com/file/d/1ddTd14cm-LejziHdUXJkhYV7yEyUI23r2/view?usp=sharing
L7	大城直樹「ポストモダン地理学とは何であったのか?」	https://www.10plus1.jp/monthly/2019/06/issue-02.php
L8	堤 研二「プラネタリー・アーパナイゼーション研究が拓く新地平」	https://dokushojin.com/review.html?id=8293
L9	『現代思想』、1999年12月号 特集：変容する空間 目次	http://www.seidosha.co.jp/book/index.php?id=2806
L10	世紀のはざままで 春日茂男先生を囲む会 講演記録	https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/kasuga.html

* の閲覧については、著者に問い合わせてください。